

論文要旨

NICU に入院を経験した低出生体重児とその母親との最早期における母子関係の構築について

飯塚有紀

本研究は、低出生体重等により NICU(新生児集中治療室)に入院し、保育器に入ることによって母子が物理的に分離されたことが、母子関係構築にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを通じて、臨床心理学的示唆を検討した研究である。

第1章では、低出生体重児をとりまく環境について示した。本研究の社会的背景として、全体の出生率が低下しているなか、初産の高齢化、不妊治療による多胎妊娠の増加などにより低出生体重児が増加していることがあげられる。現在では、出生体重が、700g あれば、90%の確率で救命することが可能である。その一方で、低出生体重児は、一般に虐待の対象となるリスクが高いといわれている。カナダのデータでは、成熟児の3倍のリスクにさらされているとの指摘もある。このような社会的背景に鑑み、低出生体重児とその母親との間の最早期からの関係について、基礎的な研究についての研究の必要であることが指摘できる。

第2章では、母子の最早期における物理的な分離についての先行研究についてレビューを行った。扱った先行研究は、生物学からの示唆、Bonding 理論、愛着(アタッチメント)理論、精神分析からの示唆の4つの理論であった。いずれの理論でも、最早期の物理的な母子の分離は、母子関係の構築を抑制するような影響が指摘されていた。

第3章では、研究の目的とその方法について述べた。本研究の最終的な目的である、NICUにおける母子関係構築を育むためには、どのような臨床心理学的介入が必要であるかを明らかにするために、研究1及び2を実施した。第3章では、研究1及び2の目的とその方法についてまとめた。まず、研究1の目的は、子どもが保育器を出て、自由に「抱っこ」ができるようになった母子の再接触場面に注目し、どのような母子相互作用が行われ、母子の分離をどのように乗り越えているかを明らかにすることであった。この目的を明らかにするためには、観察法が適当であると結論付けた。また、研究2の目的は、NICUに入院し、保育器に入ることによって母子分離と母子再接触を経験した母親の妊娠・出産も含めた主観的な体験を明らかにすることであった。この目的を明らかにするためには、質的研究法の1つである解釈的現象学アプローチが適当であると判断したため、研究2の方法に適用した。

第4章では、低出生体重児における再接触場面での「抱っこ」の変化と母子相互作用(研究1)について検討した。対象者は、都内の大学病院 NICU に入院中の子どもとその母親 20組であり、保育器を出た週(前期)と退院直前の週(後期)の「子どもの動き」と「抱っこ」に注目し、観察を実施し、比

較を行った。その結果、「子どもの動き」は前期と比して、後期で有意に増加していること、「抱っこ」では顔と顔を対面させる「対面抱き」が有意に後期に増加していることが明らかとなった。また、「対面抱き」の増加と「子どもの動き」の間には強い正の相関関係($r=.72$)が存在していることが分かった。加えて、「抱っこ」を変えるときには、母親は必ず子どもにことばかけを行っていた。このような現象はどのようなことを意味するのだろうか。おそらく「子どもの動き」の増加に反応し、「抱っこ」をかえ、顔と顔を見合わせ、声かけをすることなど様々な方法を通じて、反応性の低い低出生体重児との母子相互作用を積極的に引き出そうとしているのではないかと考えられた。このような、母親の行動が、母子分離に伴う母子関係構築を抑制するような影響を最小限に抑える機能を担っていることが推測された。

第5章では、母子分離を経験した低出生体重児と母親の関係構築について、母親の主観的体験を把握するために行われた(研究2)。対象者は、子どもが地方都市の中核病院のNICUに入院中の母親8名であった。母親には、妊娠期から現在に至るまでの体験についてインタビューを行い、その結果を解釈的現象学アプローチによって、分析を行った。その結果、【産んだ実感の欠如】【早産に伴う傷つきと自責の念】【子どもとの分離に伴う心理的距離】【身体接触による母親としての自覚の形成】【発育・疾患・障害への不安】といった5つのテーマが抽出された。この結果から、低出生体重児を産んだ母親の気持ちは、大変複雑であることが分かった。先行研究でも指摘されていた母子の分離を抑制するような母親の感情、たとえば自責の念や子どもとの心理的距離などが明らかとなった。しかし、そのような母親の感情が、母子関係構築を多少抑制するかもしれないが、本研究では、はっきりと確認することはできなかった。むしろ、「抱っこ」や「授乳」といった密接な身体接触によって母親の実感が強まり、母親らしい行動が活発になっていることが明らかとなった。

第6章では、本研究全体の知見を総合的に考察した。研究1と研究2から、次のことが明らかとなった。まず、自責の念や子どもとの心理的距離などの感情は負の要素ばかりでない。このような母親の感情は、それを埋め合わせようとして、母親が積極的に子どもに関わろうとする原動力にもなっていた。研究2で指摘されたこのような感情は、それを埋め合わせたいという気持ちを媒介にして、研究1に示されたような積極的な働きかけにつながっている可能性が示唆された。しかし、このような母親の感情は、母親にとって苦しいものであることに変わりはないので、臨床心理学的介入の必要性が指摘できよう。たとえば、【早産に伴う傷つきと自責の念】のような感情は、家族にもなかなか話せない、また、理解してもらえない感情であるので、基本的に共感と傾聴が必要であるとともに、トラウマを扱う臨床心理学的知見が適応できるのではないかと考えられた。

今後の課題としては、本研究の対象者数が少数であったことや子どもの受入れが比較的良好な母親が主たる対象であった。今後、より一般化していくためには、対象者の人数を増やす必要があるであろう。また、子どもの受入れが十分でない母親も対象とした研究も求められるであろう。更に、今回は、母親のみに注目していたが、父親も含めた家族全体としてどのように臨床心理学的に介入していくかについて検討していくことも求められる。